

新潟県民性を語る

池

まさ 栄*

風土と県民性

人間は、自分の生まれる「時」と「所」を、自分で選ぶことはできない。すべて投げ出されるのである。その場合、「所」には、政治上の枠がある。いわゆる国や県などの行政的枠である。

いま国や県という人間を包む環境 (Environment) を、比喩的に一種の土壌と考えるなら、そこに投げ出される住民という名の種子は、その土壌に育てられ、その土壌の上に、他の土壌で育ったものとは区別できる花を咲かせる。

この土壌を風土と呼び、風土は自然条件と歴史条件を持つ。国の風土に花開く国民の意識傾向は、国民性であり、県という風土に花開く意識傾向は、県民性である。

我が国は、同一言語を使用する民族国家でありながら、1都1道2府43県の歴史的、地形的な行政上の枠に分かれているため、住民は都道府県それぞれ独特な思维傾向と行動傾向を持つに至る。私のいま取り上げるのは、歴史的にも地形的にも一つのまとまりとなっている新潟県の風土であり、その風土に育てられた新潟県民性である。

昔から各県民性の発生基盤としての風土を説明するに、無数の要因が存在した。

地形、地質、災害、日照、日出、日没、気温、湿度、風、雪、雨、霧、オゾン、電磁気、動物、植生、資源、風景美等々の自然条件、それに行政の歴史過程、生産力、生産様式、地主制度、あるいは家族制度、女性の地位、エジゴ (ツグラ、イヅミ)等にもみる生活様式、風俗、習慣、さらに教育の伝統、学問系統、宗教の影響、伝承、民話、民謡、同郷出身の偉人、有名人の業績、流通する諺、揶揄の類まで含む歴史条件。そればかりでない。各県に住んでいた古代民族の体質人類学的考察、県民の血液型まで持ち出すに至っている。

このような環境の条件によって、住民の行動 (Behavior) が規制され、特徴を持つに至ると考える。

ただし環境に包まれる住民も、環境に適応しつつ、可能な限り環境の修正を続けていることはいうまでもない。

新潟県は昔から災害の多い地域であった。豪雪、なだれ、地すべり、集中豪雨による破堤、農作物収穫時に通過する台風等は、常に大きな被害を与えた。

また一村の移転を余儀なくさせる飛砂、高波、海岸決壊

*新潟県郷土資料館 顧問

等もあって、対策は容易でなかった。そのうえ本県は昭和39年の新潟地震以前、大小さまざまな地震に襲われている。しかし災害の二大巨魁^{きょくがい}といたら、本県では当然「雪」と「川」の害である。この二つは毎年のように県民を苦しめ、本県の後進性脱却を妨げていたのである。

いま県民性に影響を及ぼすほとんど無数の自然条件のうち、特に雪と海 (日本海) と川について述べてみる。

雪国のかなしみ

世界で最も多雪の地域は我が国であり、我が国で最も多雪の地域は、本県の山間部である。昭和2年2月23日、本県の板倉町では、8.15mの積雪をみた。暖国人の想像を絶する積雪である。

江戸時代の塩沢町出身鈴木牧之は「北越雪譜」で雪に対して次のような愚痴を述べる。

「むかしより今年に至るまでこの雪、この国に降らざることなし。されば暖国の人のごとく初雪を観て、吟詠遊興のたのしみは夢にも知らず。今年も又この雪中にあることかと雪をかなしむは、辺郷^{へんきょう}の寒国に生まれたる不幸といふべし。雪を観て楽しむ人の繁花^{はんか}の暖地に生まれたる天幸をうらやまざらんや」

現代の本県詩人たちも、雪に対する憤懣を自嘲的に歌う。

「しむ しむ しむ 音のない夜は気をつける 夜が明ければ穴ん中 雪のふとんがずっしりと 骨身にこたえる 雪国ぐらし 雪のけ 雪掘り 雪下し 半年あまりも穴倉で ただ耐えることを 忘れて耐える 犬猫熊と人間のくらし」(中村千枝子 わたしの風紋)

雪国の住民は、暖国人に対してばかりでない、都会人に



新潟県の豪雪

特別講演

対しても複雑な感情をもつ。

「都の暇人よ 雪見に来ませ 越路の涯の山里へ 風流
心で来るもよし スキー担いで来るもよし 今が見頃の雪
二丈だ 雪に埋れた部落の底で 土着の衆の因果を肴に
雪見酒など酌むもよし 話の種にはなるだろう 雪の下な
る人の棲み家は 奈落のように暗いけど 天井表が雪地
獄なら ここは一先ず極楽だ る端で味わう熊の肉や 蝮
の燻製などもまた乙なもの 塩漬けの山菜もあるし 腐れ
卵が匂うような五右衛門風呂も立つよ 里唄などと気の利
いたものはないが 奈落の揺れるろうそく囲んで 誦ずる
和讃の一つも 都への土産代りに覚えてゆきやれ 雪のス
リルを味わいたくば スキーで山へ行くもよし 雪女にだ
って逢えるだろう それに迷うて吹雪かれて棒鱈みたいに
凍えてみたり 雪庇で谷へ落ちこんだり まんだ足りなき
や雪崩もあるよ 死のと生きよと 雪山の 恥は掻き捨て
雪見養 雪見に来ませ 越路の涯の山里へ 暦は立春 丁
度見頃の雪二丈だ」(小柳俊郎 雪見招歌)

本県北魚沼郡出身の歌人宮柊二(昭和61年没)は故郷を
偲んで歌う。

空ひびき土ひびきして雪吹ぶく

さびしき国ぞわが生まれぐに

積雪地帯の住民は、暖国へ出稼、あるいは移住を余儀なくされる。冬でも水を扱い、早期に起きて重労働といえ、豆腐屋、風呂屋、魚河岸の従業員、酒造りの杜氏などである。本県人は、このような下積み肉体労働に従事して、それを黙々とこなす。

積雪は、住民の思惟と行動に翳を与える。本県人が沈鬱であるのも、その歌う民謡の暗いのも、山間地域に老人自殺の多いのも、この翳と関係がある。

江戸時代、豪雪地帯十日町に発生した「新保広大寺」という民謡は、越後の盲目の遊芸人ゴゼや、越後出身の遊女などによって上州に伝えられた。そのメロディーは哀調を帯びたものであったが、いったん日照度の高い、農業構造もちがう群馬県人に歌われると、「八木ぶし」という景気のいい賑やかな民謡に変わってしまったのである。

カリスマを生む日本海

佐渡および越後の海岸線地帯は、山間部に比べ降雪が少ない。しかし冬の日本海は、鉛色の雲が低くたれこめ、砂まじり飛沫まじりの寒風が横なぐりに吹きつけ、おどろおどろの海鳴りと共にケモノのキバのような白浪が休むことなく押し寄せる。

柏崎市出身の創価学会創立者牧口常三郎は、その著「人生地理学」で、海水の大量とその威力は、人間を先ず恐怖させ、その恐怖が去ると、海の壮宏雄大は人間を宗教的に感化する、といっている。

本県の海に臨む部落からは、教祖(charisma)あるいは

教祖的な人々が出ているが、海、特に冬の海の間人心理に及ぼす影響を否定するわけにはいかない。

前記牧口常三郎、出雲崎からは良寛、間瀬からは右手にハンマー、左手にバイブルを持って受刑者更正教育に情熱を傾けた熱烈キリスト者本間俊平、佐渡の両津からは二・二六事件の指導者で法華経信者の北一輝等々。

北の海は、民謡などにも哀調を与える。九州の海の騒ぎ唄である「はんやぶし」が日本海の白浪に揉まれると哀調切々たる「おけさぶし」と変化する。本県の海港、川港のほとんどすべての港に地名のついた「おけさぶし」があるが、すべて哀調をおびている。

賑やかな「三原ぶし」や「阿波おどり」も、やはり「はんやぶし」に起原をもつが、それが一たん波おだやかで物産豊富な瀬戸内海に入ると、「おけさぶし」とは逆さに喧騒さを増す。民謡を比較してみても、日本海の荒涼さを思わずにはいられない。

それは「越後追分」についてもあてはまる。「越後追分」は、のんびりした信州馬子唄の「追分」が越後に伝わって、陸上の唄から海上の唄となったものである。海上の唄となって日本海航行の船頭たちに歌われると、メロディーは哀調を帯び、歌詞まで「櫓も櫓も浪にとられて身は捨小舟どこへとりつく島もない」などと悲愁を湛えたものになるのであった。

窮迫のどん底

本県は日本の穀倉である。しかし河川工事の発達しないころ、信濃川、阿賀野川のような大河はしばしば氾濫を起こし、水田耕作の百姓たちに「田植はあっても稲刈なし」の歎きをさせるのであった。

信濃川の破堤は、江戸時代86回、明治時代18回、大正時代3回の計107回あり、阿賀野川も大破堤と呼ばれたものだけでも文政3年、安政3年、明治大正時代4回を数えることができる。

信濃川破堤の脅威は、大正11年大河津分水工事完成まで消えなかった。破堤の結果、住民は窮乏のどん底に呻吟する。その窮状を宝暦8年の「横田切れくどき」は次のよう



新潟県の洪水

に描写する。

「三度四度に及びし水に、薪飯米味噌塩までも、貰い集める手だても尽きて、近所村々袖乞い風情、昨日今日まで人なみ世なみ、肩を並べし百姓衆の、嬬や娘が笠一蓋で、伊勢の京のと因幡の峯よ、男の子供は江戸三界に、泣いて別るる哀れのからす」

大洪水に遭っての一家離散は、決して珍しいことではない。いたいけな男の子たちが、獅子の子として訓練を受け、江戸の地で演技をしてみせる「角兵衛獅子」などの本場は、やはり洪水の害にしばしば見舞われる川筋の村であった。

女の子は、水害に遭ったり、家族に病気が出たりすると、やむをえず身を売って、中山道、北国街道、奥州街道などの宿場に身を沈めて「飯盛女」となる。いわゆる宿場女郎で、薄幸に泣きつつ、短命で終る者が多かった。

世に貧よりつらいものはない。越後の慢性的飢餓状態が、どんなに越後人の思惟と行動を規制したことか。

浄土真宗の流行地帯

新潟、富山、石川、福井の北陸4県は、浄土真宗（御門徒）の流行地帯である。

本県の浄土真宗寺院の数は、1200寺を超え、かつては住民の精神生活を支配していた。

昔から浄土真宗信者は、他宗の信者から「門徒物知らず」と嘲笑されているが、それは「門徒物忌み知らず」の略されたものである。

物忌み知らずとは、既成の宗教的行事や宗教的慣習に従わないことをいう。しかもその態度は、宗祖親鸞の教えるところであった。

親鸞はその著「愚禿悲歎述懐和讃」に今までの日本仏教が本来の仏教から外れ、外道に墮落した証拠は「かなしきかなや道俗の良時吉日えらばしめ、天神地祇をあがつつ、卜占祭祀つとめとす」という点にありとした。

そのため門徒宗は、うらない、まじない、おふだ、おみず、加持祈禱を拒否しろ、拒否してひたすら念仏だけを申せと僧侶から指導され、吉日や悪日も問題にしない。

このような門徒信者を非難して「門徒物知らず」というのである。本県および北陸の門徒宗は、既成の迷信を信じない一種の合理主義的思考の傾向があるのである。

本県出身の浄土真宗二大学者と呼ばれる大谷大学の曾我量深と金子大栄は、信仰問題について一時異安心として、大学を蹴首された事がある。本県門徒学者の生まじめさから発する合理主義傾向が、非難された結果であったろう。

門徒宗信者は、家庭内に安置する仏壇だけは豪勢なものを購入しようとするが、冠婚葬祭は全国的にみて、質素なものである。それというのも門徒宗の信心第一主義の影響と思われる。その質素さが、県民の経済的逼迫と結びついて、本県住民の家庭行事などは、簡易的なものが多い。

このような宗教上の合理主義と簡易主義は、県民性を特

徴づけている。

門徒宗僧侶は、最近「お講」「お座」という説教活動をあまりやらなくなったが、かつては寺院においてはもちろん、名家庭に出張して布教したものである。その際、僧侶は人間の欲望処理の考え方として「下をみればキリがない。上をみればホシばかり」などと教えた。すなわち要求水準を低く持った方が、人の世では幸せだと教えるのであった。その結果は、本県人の現状肯定傾向となって今に現れる。

昭和53年8月のNHK放送世論調査所による全国県民意識調査において「今の日本はまあいい社会だ」という選択肢に否定的な選択をした県には、高知県、岩手県、秋田県などがあったが、本県、富山県、石川県などの浄土真宗流行地帯の県民の多くは、「そう思う」と肯定的な応答をしているのである。特に本県民は、「そう思う」と答えた率が全国第一位なのである。

県民の沈鬱性

戦前の政治家永井柳太郎（石川県出身）は、北陸3県をヨーロッパの露・独・仏にたとえ「新潟県は地主制度の点でロシア、富山県は薬品工業が発達しているからドイツ、石川県は芸術の優秀さでフランス」と演説をしたことがある。

地主制度、積雪という点では、たしかに本県はロシアであり、さらに無口・沈鬱という県民傾向からいってもまさにロシアではある。

無口、それは考え深げに見えるが、また何を考えているかわからないと非難されることもある。

本県民は、会議などで積極的に発言することが少ない。おしゃべり屋が少ないことは、本県内を走るローカル線やバス内の静粛さでよく分かる。他県のように乗客が大声を発したり、高笑いをしたりしないのである。

高校生や中学生の態度が全国的に比較されるのは、修学旅行などの際である。本県の生徒は、京都・奈良などの旅館に宿泊しても、他県の生徒に比べて旅館に注文をつけたり、器物を破壊したりせず、非常に静粛であるとの定評がある。

無口は沈鬱さにつながる。沈鬱さは人間を内省的にする。本県に井上円了、曾我量深、金子大栄をはじめ多くの仏教学者が輩出したのは、内省的に哲理を追究する人の多いことを示す。

しかし沈鬱さは、胸に鬱屈するものを解消することができず、鬱々とものごとを考えさせやすい。自殺者が本県に多いのはそのためであろう。昭和61年度の本県自殺者は704名であった。特に老人自殺と呼ばれる60歳以上の自殺が顕著である。

本県人は社交下手で、人と積極的に交渉したり、自己を相手に印象づけたり、売り込んだりする事が上手とはいえない。150年前に没した良寛の性格に似ている県民が多い。良寛歌っていわく「世の中にまじらぬとにはあらねどもひとり遊びぞわれはまされる」

特別講演

12世紀の西行と19世紀越後の良寛。その活躍年代に650年の隔たりはあるものの、いずれも出家であり、いずれも文芸人である。

西行の和歌の主題は、ほとんど「花」であり「月」であって、華々しいものである。それに比べ、日本海の荒波押し寄せる出雲崎に生まれ、雪の越後に生を終える良寛の漢詩、和歌に頻繁に出てくる文字は「夜」、「雨」、「孤」であり、「乞食」であり「児童」である。

いま良寛の七言絶句一首を挙げ、拙訳をつけてみよう。良寛の詩には、この詩のような沈鬱なものが多い。

回首五十有余年	首ヲ回ラセバ五十有余年
人間是非一夢中	人間ノ是非一夢ノ中
山房五月黄梅雨	山房ノ五月黄梅ノ雨
半夜蕭々灑虚窓	半夜蕭々トシテ虚窓ニ灑グ

(訳) 五十路の山越え
ふりかえる
人の世のいいのわるいの
そりゃ儂いものよ
山の庵室さみだれどきで
夜中の雨が窓ぬらす

新潟市生まれの歌人で書家の会津八一は、「天地モトヨリ寥廓タリ」と人生の寂しさを強調したが、詩経に出てくる「独行踽々」(たったひとりでみをやく)、「鹿鳴咷々」(しかがむせびなく)などの言葉を愛し、その歌集を「鹿鳴集」と呼んだ。またその他の歌集にも「寒燈集」など孤高を思わせる名を付けている。

しかなきて かかる さびしき ゆふべ とも
しらで ひとす なら の まちびと
(鹿鳴集)

ひかり なき とこよ の のべ の はて にして
なほ か きく らむ やまばと の こゑ
(寒燈集)

新潟県出身の文学者には、二つの共通傾向が見られる。長編をものする持続力のある点、それに作品内容に暗さが多い点。

日本のアンデルセンと呼ばれた上越市出身の小川未明の作品には、薄暗い風土が影響し、沈鬱というか哀調というか寂しさが底流する童話が多い。

未明の童話は、登場人物がすでに暗い。夫のいない貧しい、しかも口の不自由な女(牛女)、七歳で亡くなってしまふ病み上がりの少年(金の輪)、よわよわしい目の見えない男の子(港についた黒んぼ)等々。そのうえ童話の結末もハッピーエンドで終わらないものが多く見られる。

暗さといえば、大逆事件の弁護で有名な新潟市出身弁護士平出修の小説「夜鳥」などは、貧村の貧農の女房が主人公であり、その亭主は、窃盗罪で逮捕されているという設定である。雑誌「明生」の創刊に努力する歌人平出修も、いざ小説を書くとなると、暗さが全編を覆っていて、まるでプロレタリア小説を思わせる。

長岡市出身で夏目漱石の弟子松岡譲の小説「法城を護る人々」なども、長編で暗いという二条件を備えている。未発表の「兄を殺した少年」は、ロシアのドストエフスキーの作品を連想させる暗いものである。

戦後一躍文壇で有名になった新潟市出身の作家坂口安吾の「母を殺した少年」は、殺人強盗など兇悪犯罪が少ないかわりに暗い尊族殺傷の起こりやすい県民性を暗示するといっている。

安吾の「吹雪物語」は800枚の長編であるが、吹雪の新潟市を舞台に、どのくらい孤独、絶望、暗澹、落莫という文字が出てくることか。この作品を一読し、暗鬱な住民の心象を追体験すると、やりきれなくなるであろう。

文学者における沈鬱傾向は、絵画の世界でも指摘することができる。

安宅安五郎、佐藤哲三、小野末、横山操、富岡惣一郎等々の本県出身画家らは暗いモチーフを暗い色彩、あるいは黒と白だけで表現した点に共通性をもつ。

県民の多くが信じている浄土真宗は、同宗中興の祖といわれる蓮如の手紙形式の「御文章」などを繰り返し読み聞かせることによって、信者に深刻なる無常観を抱かせたことはまちがいない。

特に「白骨の御文章」の「我やさき、人やさき、今日とも知らず、あすとも知らず、おくれさきだつ人は、もとのしづく、すえの露よりもしげしといえり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり」を荘重な音声で聞かされる場合、土葬でなく火葬の本県風習と相まって、県民は、暗い無常思想を与えられた。

県民の実直性

他県から本県に転住した人は、たいてい「新潟県人は無口だが親切だ」という。前記NHKの調査における次の問いに対する応答なども、人情県民性を裏付けているといえよう。

「あなたの(都道府)県で特に好きな点を次のリストから一つだけ選べ」というのに対し、本県住民が全国で最高に選んだのは、「人情」という徳目的な項目であった。そのことが暗示しているように、県民は実直というか誠実というか、とにかくまじめなのである。

(リスト) 1気候 2自然の風景や名称 3人情 4歴史や文化財 5伝統行事や郷土芸能、お国ことば 6食べ物や特産品 7新しい文化 8経済的活気 9その他 10ない

伝統的に越後人が律儀であったことは「頼まれれば越後から米搗きに」の言葉が示しているように、約束がありさえすれば、遠距離や重労働など問題にせず働こうとするのである。

越後人の律儀さについて、天保8年越後での刊行物「救荒孫之杖」は次のようなエピソードを伝えている。

「それは宝暦飢饉のときであった。加茂町の近在に50歳位の独身農夫が餓死してしまった。検死の役人が調査すると、死体の側に米2俵がキッチンと並べられ、俵の上には地主あてに『御収納米二俵』と書かれた札が立っていた。死に瀕する農夫は、地主に納める米だけは、遺して置いたのである」

越後の農民が、一家の亭主として一丁前、一人前であるには四つの義務を履行することが必要であった。

1. 上納を怠らないこと
2. 先代の年忌法事をやること
3. 伴に嫁を貰うこと
4. 屋根の葺き替えをすること

新潟県は、戦後の農地解放までは、一千町歩地主5家、50町歩以上所有の地主258を数える地主王国であった。これらの地主に対し小作人である水呑み達が、地主への上納を怠らぬことを第一とする実直さを持ち続けていたため、まさに地主天国であったのである。

江戸時代の越後農村の窮乏原因は種々あるが、大きな理由の一つに人口の過剰がある。その過剰になった理由は、越後人が間引をしなかったためであるという。周知のように、貧窮一家の家族が生き残るためには、生まれてきた嬰兒の生命を奪っても致し方なしとする間引の風習は、全国的に広がっていた。ところが越後だけは、その風習を持たなかったという。

越後出身の経世学者本多利明は、その著「蝦夷道知辺」で「雪国の内にも、やはり間引する国々多し。その内、越後には今に間引する悪癖なし。いかなる貧民にても、出生の子あり次第に幾人も養育す」と断言している。

生活が苦しいにも拘わらず間引しない理由には、宗教上の慈悲心もあげられるが、何よりも越後女性の実直さがそうさせているのではなからうか。

越後の女性は、素直というか、運命に従順というか、裏表がないというか、置かれた状況をそのままに受け取って働きに働くのであった。

江戸時代、貧窮のため花柳界や宿場町に働く女性について「越後女は三割増し」という評価が行われていた。一割は他国女性より色白であること、次の一割はどこの女性に比べても素直で主人の言い付けによく従うこと、最後の二割は、好きな男性ができて、情死や逃走をしないことなのである。郷里にいる家族に金銭上の迷惑のかかるのを恐れ、情死などしないのだという。

その伝統的素直さは、現在でも本県勤労女性の気質の中

に見られる。新幹線車内における物品販売員として本県高校卒の女性を採用すると、陰日向のない働きをし、接客態度も指導された通りに実行するので好評噴々である。ために本県と関係のない東海道新幹線などでも、新潟県高校卒採用者を回してくれ、との要請があるという。

戦国時代の武将で、皇室、将軍、公卿のすべてから信用された者は誰か。それは越後の上杉謙信である。

謙信の表裏のない誠実な行動は、後奈良天皇、正親町天皇、将軍足利義輝および義昭、それに關白近衛前嗣などから絶大なる信用を獲得したのである。

謙信は「筋目ヲ守ッテ、分ニ非ルコトヲ致サズ」をモットーとし、出陣の際は天地神明に正義の行動を誓い、降服する者は宥し、戦いに勝っても領土を奪うようなことをしなかった。

この一種のマジメ越後人の代表上杉謙信は、県民から偉人として敬慕され、男性行動の模範と仰がれている。したがって県民の誠実さの助長に大きな役割を果たしている。

天下の大勢を知らぬといえどもそれまでだが、最後まで態度を変えず信義を守ったという点で、戊辰戦争における越後長岡藩の指導者河井継之助などは誠実人の好例とされている。

河井は、今まで支配を受けていた徳川幕府に義理をたてて裏切らず、怒濤のように押し寄せてくる官軍と死闘すること4か月、遂に敗北した。戦争の結果、長岡藩および住民は大損害を受けたが、戊辰戦争に一貫した態度を取り続けたという点で、県民は誇りを持っている。その誇りは機会あるごとに持ち出され、信義宣揚に役立っている。

謙信はもちろんのこと、敗北したとはいえ長岡藩も越後人からなる精兵を擁していた。

精兵の条件は、勇敢であり、職分に忠実であるということである。明治の日清、日露の戦争でも大正のシベリア出兵においても、本県人は精兵ぶりを発揮した。与えられた職分を、生命を賭して堅持する点で、定評があったのである。

精兵ぶりは、満州事変以後太平洋戦争の終末まで発揮され、そのため多くの戦死者を出した。いわゆる15年戦争で本県人は、35万人動員され約7万人が戦死した。戦死者のパーセンテージが高いのは、ノモンハン、ガダルカナル、インパール等激戦地に出動させられたためもあるが、なんといっても、与えられた任務を遂行しようとする県民の実直さに依ることが多い。

成田空港開設反対騒ぎでデモ隊に囲まれ、火炎ビンの犠牲に最初になったのは、本県出身の応援警察官であった。このように自己の職務に忠実なため、殉職する人々の多い現象は、本県教育界にも見られることである。本県教育史をひもどくと、小中学校の教師で、生徒を救おうとして自己の生命を失ってしまった殉職記事がいかに多いことか。

本県人の実直さを示す事例としてよく挙げられるのは、本県がNHK加入率第一という事実である。ごま化すよう

特別講演

な事をきらうためである。なお本県人は、ローンなど借用の場合、返済を先ず考え、満額を借りまいとする傾向があるといわれている。

県民の持続性

この道のほかに行くべき道はなし
がまんがんぱり今日も明日も

いかにも越後人的発想の歌である。努力をしろ、それを継続しろ、そこにこそ栄冠があるという教訓歌である。

作者は、脳神経学の「錐体外路系の研究」で日本学士院賞を受賞し、京都大学総長も務めた医学博士平沢興である。本県には、多くの平沢賛美者があり、平沢イズムの影響は大きい。

農村出身の博士は、農民伝統の汗第一主義、持続力発揮主義の実践者であり、提唱者でもある。博士はその著書で、先ず人間に無限の可能性のあることを認め、「努力さえすれば、だれにも幸運の扉は開かれる」とし、「天才とは1%の思いつきとの99%の汗である」というエジソンの言葉に同感を示し、「何よりも大切なことは、一度やろうと決心したことは必ずやり通すこと」と努力継続主義を強調している。(山はむらさき)

新潟県人の継続力を説明する場合、絶好の例として挙げられるのが、象幸太郎41年目の仇討である。

幸太郎の父が碁のトラブルで殺害されたのは、文化14年幸太郎7歳のときであった。封建社会の道徳に従って仇討を覚悟させられたその時から、元号は文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政と変ったが、父の仇を追跡する幸太郎の志は、いささかも変らなかつた。恐るべき継続力であり、執念ではある。

安政4年8月、幸太郎はついに仇討を成就する。幸太郎は、父が殺されてから41年目に目的を達成したのである。曾我十郎五郎の仇討は、16年目であったが、幸太郎は、それを越すこと25年であり、我が国仇討史上のレコードホルダーである。

先に長編をものする新潟県文学、それに反する群馬県文学と指摘したとおり、群馬県は詩や短編にすぐれているかわり長編はあまり見られない。有名文学者として詩人山村暮鳥、萩原朔太郎、高橋元吉や短編作家であった田山花袋、生方敏郎等を挙げても長編作家ではない。

本県小出町出身の作家山岡莊八。その歴史小説「徳川家康」は全26巻、足かけ18年の長年月をかけたものである。山岡は「織田信長」、「豊臣秀吉」、「源頼朝」、「独眼竜政宗」なども発表しているが、すべて並々ならぬ継続力を必要とする長編であった。

本県人の持続力は、辞典辞書類の編纂に遺憾なく発揮される。

本県佐渡の司馬凌海は、早くも明治5年「和訳独逸辞典」

を、西蒲原郡出身の小柳司気太は、大正5年「詳解漢和大字典」を刊行した。このような根気のいる仕事は、石を一つ一つ積むような努力を続け、最後に「累石の功」をみるのである。

本県の生んだ兄弟史家吉田東伍と高橋義彦。兄吉田東伍の越後人としての本領は「大日本地名辞書」の編纂に発揮された。彼は心血を注ぐこと13年、ついに大冊3段組全5巻1万ページを超える辞書を完成したのである。

弟高橋義彦は、越後と佐渡に関する古文書、文献を広く収録し、前人未踏の「越佐史料」を昭和6年第6巻刊行までこぎつけた。大正6年に兄と相談して編纂決意をしてから、第6巻刊行まで足かけ16年の努力であった。

文化勲章を受賞した文学博士諸橋轍次(昭和57年没、99歳)は、本県南蒲原郡の出身である。その著「大漢和辞典」13巻は、驚異の大作でページにして約1万5千ページ、漢字の「一」という文字の解説だけでも、4段組72ページを費やしているほどである。

諸橋博士は、越後人的根気を遺憾なく発揮した。太平洋戦争前後35年、編纂に心血を注ぎ続けたのである。その間編纂関係者は44名も死亡し、昭和20年2月には、戦災により組置き原版一切焼失の不運もあったが屈しなかつたのである。

この世界的文化財産を活字にしようと、会社はもちろん3人の男の子の運命まで賭けて努力した書店大修館主鈴木一平氏も偉いが、同氏から次のような感謝の言葉を捧げられている博士の態度も、新潟県人的信義実践の模範例としてしばしば取り上げられている。出版後記で鈴木氏いわく「戦災によって私の再起を不可能と見て他より出版の交渉があった時、諸橋先生は泰然として動ぜず、この出版は私以外には完成できないことを信じ、その申出を退けられた。そればかりでなく、私を鞭撻ください……」

新潟県人のネバリ強さとは、換言すれば、ものごとに飽きがこないということである。

これは推測であるが、本県人は離婚統計などなかつた時代でも、最近と同じくいったん結婚したら離婚しなかつたのではあるまいか。今も昔も新潟県夫婦は、耐忍力があつて破局に至らないのである。げんに昭和61年度の本県離婚率は全国最低に近く46番目。昭和53年度などは全国最低であった。

本県人の持続力は、すでに定評となっていて、小説上のイメージ構成にまで役立っている。

菊池寛の小説に「恩讐の彼方」というのがある。九州の耶馬溪に青の洞門を掘る物語であるが、主人公の市九郎僧となつての了海は、越後柏崎の出身ということになっている。越後人イクオール忍耐強いというイメージの裏付けが、黙々と21年間ノミを振り続ける了海なる人物に迫真性を与えている。

(原稿受理 1987.7.13)